

「研究第一主義」小考 —『東北大学五十年史』をめぐって—

本 村 昌 文

はじめに

東北大学は、建学以来の伝統である「研究第一」と「門戸開放」の理念を掲げ、世界最高水準の研究・教育を創造する。また、研究成果を社会が直面する諸問題の解決に役立て、指導的人材を育成することによって、平和で公正な人類社会の実現に貢献する⁽¹⁾。(下線は筆者による、以下同じ)

この文章は、東北大学の Web サイトにある大学案内冒頭の「使命と目標」にみられるものである。東北大学の伝統や理念として、最初に掲げられるのが、「研究第一」もしくは「研究第一主義」という語である⁽²⁾。

平成13年(2001)4月から東北大学の在り方に関する検討委員会において、東北大学の理念について検討が重ねられ、同年11月20日の評議会において、「東北大学の理念」に関する報告(「東北大学の在り方に関する検討委員会報告Ⅲ—「東北大学の理念」について—」、以下「検討委員会報告Ⅲ」と略す)が承認された⁽³⁾。報告の中には、この検討において最も重視されたのが、「東北大学で創立以来説かれてきている、『研究第一主義』や『門戸開放』などの考え方を本学の『理念』としてどう位置付けるか」ということであったと述べられている⁽⁴⁾。「研究第一主義」という語は、生命を失った過去の遺物ではなく、現在の東北大学のあり方を規定する重要な一要素にほかならない。かかる機能を有する「研究第一主義」について検討することは、大学の理念の明確化が求められている今、きわめて重要な意味をもつといえよう。

上記の「検討委員会報告Ⅲ」において、東北大学の理念を歴史的に検討する際に参照されたのが『東北大学五十年史』である(以下、『五十年史』と略す)⁽⁵⁾。昭和35年(1960)に刊行された『五十年史』の見解はいまなお参照すべきものとして、強い影響力を有している。とするならば、「研究第一主義」・「研究第一」に関する検討をするためには、まず『五十年史』に示された見解を見直す作業からはじめる必要がある。

筆者のみるところ、『五十年史』の「研究第一主義」を含む東北大学の学風に関する記述は、事実の羅列にとどまらない一貫した基調を有している。それゆえ、『五十年史』に挙げられた一つ一つの事実の是非を問題化するのみならず、それらの事実を組み合わせで構築された見解を貫く基調に目を向けなければ、『五十年史』に提示された説を根本的に見直すことができない危険性がある⁽⁶⁾。

また『五十年史』の見解を検討するにあたり、筆者が注目したいのは以下の記述である。

東北大学の学風は研究第一主義だといまにおいてもいわれることがあるが、右のような次第で、一つのスローガンになったにすぎないといつていいと思われる(『五十年史』上・130頁)。

この記述は、『五十年史』の見解が編纂当时に存在していた「研究第一主義」の捉え方を意識して構築されたことを物語っている。すなわち、『五十年史』に示された見解は、編纂当時の東北大学の学風や「研究第一主義」に関する議論の状況に規定された産物なのである。それゆえ、『五十年史』の見解を検討するためには、編纂当時の時代状況との関わりを視野に入れることが求められよう。

以上の問題意識をもって、本稿は『五十年史』に示された見解とその基調を検討することを目的としている。具体的な考察にあたっては、『五十年史』編纂当時の周辺資料にも可能な限り目を向けていくことにしたい。

1、「研究第一主義」の提唱者

いま私たちは、「研究第一主義」とは東北帝国大学の創設時から唱えられてきたものであり、初代総長である澤柳政太郎の掲げた理念に由来するということに違和感をおぼえることはないだろう。そのため、「研究第一主義」を語るときに、まず澤柳からはじめるということが自然のこととなっている。『五十年史』では澤柳の入学式訓辞や『河北新報』（明治44年9月12日・13日）に掲載された「東北帝国大学」と題された文章をもとに、「理科大学は内に学術研究第一主義をとり、外に社会と親近し実用を忘れざるの主義をうち立てた」と述べている（『五十年史』上・65頁）。しかし、「研究第一主義」の語と澤柳を結びつけることは、それほど自明のことなのであろうか。

まず戦前における「研究第一主義」・「研究第一」に関する資料をみてみよう。

- ① 本学に於ける研究第一の学風は創設の頃から次第に育つて行つたのであるが、その研究を發表する為に創立当初より東北理科報告を出版した⁽⁷⁾。
- ② 東北大学は明治四十四年九月理学部の創設に始つたのであります。当時第二高等学校の構内の一隅を区劃して建てられた一棟の煉瓦造の家屋と一棟の煉瓦色に塗つた木造の建物と小講堂とが大学の殆ど全部でありました。其後大正四年九月に医学部、同じく八年五月には工学部、同じく十二年四月には法文学部が増設されて、現在の総合大学を見るに至つたのであります。又其間に大学として研究上最も必要なる四つの研究所、即ち金研、通研、農研、鑛研等が設立せられ「研究第一」主義たる本学の特長が益發揮されて来ましたことは真に慶賀に堪へませぬ⁽⁸⁾。

①では、「研究第一の学風」が創設期（ここでは理科大学の設置時）から形成されていったと述べられ、その研究を發表する雑誌の出版と関係づけて説かれており、澤柳との関係性は明記されていない。②では「研究第一主義」は、東北帝国大学の「特長」とされ、金属材料研究所・電気通信研究所・農学研究所・選鉱製錬研究所という四つの附置研究所の設置によって、その「特長」がいっそう發揮されてきたと捉えられている。ここでは附置研究所の存在が「研究第一主義」と関係づけられ、澤柳との関連はみられない。戦前における「研究第一主義」・「研究第一」という語と結びつけて語られるのは研究に関する事象であり⁽⁹⁾、はっきりと澤柳に結びつけた発言を見いだすことはできない。

時代が下って、『五十年史』が編纂される頃には、「『研究第一主義』ということがいつ頃から言われ始めたかははっきりしないが、本多学長あるいはその前の小川学長などが機会あるごとに述べられていたように思う」⁽¹⁰⁾ と、総長が「研究第一主義」の使用者として指摘されるが、それは澤柳ではなく、小川正孝第4代総長、本多光太郎第6代総長である。さらに注意すべきは、「研究第一主義」という語は総長ではなく、その他の教授たちの発言を根拠に語られている例が目につくことである。

この本学に創立以来脈々と波打っている精神は「研究第一主義」という精神である。本学は発足当時から理科系の大学として発足し、その学問に対する熱意は教授自ら夜を日に次ぎ身をすり減らすような研鑽を続けて行つた。これは本学の中核を作る人々のみでなく、一人一人によつてつちかわれて来たのである。木村男也教授の「教うるに厳ならざるは師の怠りなり」、井上仁吉教授の「大学に入った以上は自分でやれ」、八木秀次教授の「先人の粕をなめるな」、遠山郁三教授の「教室で研究した以上は一般の町医者たるなかれ、よろしく医者たるべき」との各教授の言葉にあるように、絶えざる研と独鑽創（研鑽と独創か一筆者注）を求めて行つた⁽¹¹⁾。

ここには、木村男也教授（医学部）、井上仁吉教授（工学部）、八木秀次教授（工学部）、遠山郁三教授（医学部）の発言が「研究第一主義」を裏づけるものとして示されている。とくに、木村男也教授の言葉は「『教うるに厳ならざるは師の怠りなり』というかつての医学部教授の信条に見られるように、『研究第一主義』という精神が創立以来脈々と波打っている」⁽¹²⁾ というように、「研究第一主義」の象徴としてよく利用されている。『五十年史』の編纂前後においては、「研究第一主義」という語は実にさまざまな人物に結びつけられて理解されていたのであり、必ずしも澤柳と「研究第一主義」という語が結びつけられることは自明のことではなかったのである⁽¹³⁾。

このようにみると、『五十年史』の見解のひとつの特色が、初代総長の澤柳と「研究第一主義」の関連づけにあるといえる。しかし、『五十年史』の主張の眼目は、澤柳が「研究第一主義」を唱えたということだけにあるのではないと筆者は考えている。『五十年史』の基調を明らかにするために、引き続きその見解を追ってみることにしたい。

2、「澤柳の専門、北条の学者、福原の実用」—総長と学風

前節の検討と関わるが、『五十年史』では学風形成に果たした総長の役割が強調されている。たとえば、「澤柳の専門、北条の学者、福原の実用」という一文は、「検討委員会報告Ⅲ」にもふまえられているように、東北大学の学風・特色を検討する際に影響を及ぼしている。「北条」は第2代総長である北条時敬、「福原」は第3代総長である福原鏗二郎を指す。つまり、『五十年史』では初代から第3代総長までの発言を創設期の学風と関係づけて説くのである。

では、このように初代から第3代までの総長の発言と学風を関係づけることは、『五十年史』の独創とみなしてよいのであろうか。ここで注目したいのは、『五十年史』にある「大正四年四月、第一号を出した理科大学の自習会報^{ママ}は、やはりそのような大学の理念を論じた文章をも

のせている」という記述である（『五十年史』上・130頁）。『自修会報』第6号（大正10年・1921）には、化学科第1回卒業生である小野平八郎の執筆した「新学風と大学精神の高調」という文章が掲載されている⁽¹⁴⁾。この文章は、「東北大学の精神確立は今将に分岐点に立つて居る。……東北大学は、学生、職員、教授一齊に自覚して此の大学精神確立のために一大奮闘を開始すべき」時期であるという認識のもとに書かれたものである。小野は「東北大学の教育方針基調即ち東北大学精神」と捉え、澤柳・北條・福原の教育方針を以下のように述べている。

- ① 四十四年三月、澤柳政太郎氏が総長として赴任せらるゝや、『大学教育も一種の職業教育に過ぎない。』と云ふ主張を高調して、……学者、技師、教師あらゆる職業者を作り出す目的があると云ふので、教育の根柢方針は此点から出発して行つたのである。国家有用の財を専門的に、職業的に作ると云ふ方針であつた。
- ② 大正二年、北條時敬氏が師範校長から転任して来られた時は、従来の方針に一大変化が表はれた。即ち学者的といふ教育方針であつた。勿論、開学式に於ける北條総長の式辞も、学者を作る所が大学であるといふ様に聞かれた程であつた。
- ③ 福原^{ママ}鐔次郎氏を大正六年総長として迎へた時は、恰も欧州大戦に依る日本の産業革命の時代であつた。学生も教授も総長も皆急迫した時代要求に順応して職業者としても満足し、技術家、専門家として喜悅しながら、其の時代要求の教育を受授したのであつた。……『今は時代の強請があるから止むなく此の儘にして、職業教育的方針を進めて居るが、時代の要求の停止した時、東北大学は人間としての教育をやる方針に変更されねばならぬ』とは親しく自ら断言された所であつた。

3人の総長の教育方針を東北大学の学風の確立と関係づけて取り上げ、澤柳は「国家有用の材を専門的、職業的に作る」、北條は「学者的、学者を作る所」、福原は「職業教育的方針」というように表現している。『五十年史』とまったく同一の記述というわけではないが、澤柳については「国家有用の財を専門的に、職業的に作ると云ふ方針」と、『五十年史』同様に「専門」という表現を使用している。また福原については「職業教育的方針」と捉え、それを第1次世界大戦下における時代の要求と関係づける点は、『五十年史』の以下の記述と同趣旨といえる。

第三代の福原総長は、この倫理色をまったくふり払つたようである。そうして大学もまたおのずから職業教育に効果ある点を強調している。これは大戦の進行にともない、社会経済的発達が、『実用的』人材をひろく要求してきつつあるのにも応じたのであろう。

（『五十年史』上・129頁）

以上の類似性をみると、『五十年史』の澤柳、北條、福原を学風の形成と関係づける構想には、小野の文章がヒントを与えたと言ってよい⁽¹⁵⁾。もちろん、『五十年史』では他の資料も引用されているが、小野の文章によって、『五十年史』では創設期の学風を専門・学者の養成・職業教育とバリエーションに富んだものとして描くことが可能となったのである。

言うまでもなく、小野の理解が歴史的事実として妥当か否かということも問題化する必要があるが、ここでは小野の文章をふまえることによって述べられた『五十年史』の以下の記述に注目したい。

初期三代の総長が、それぞれに標語的に抱負をのべているのは、新設大学としてまだかたまっていない時だから、こののちの進みかたに思いを致したのであろう。その時の世間の情勢にも対応して、大いに大学の存在理由を考え、説いたものであろう。しかし、もともと、彼らのいうさまざまな性質はすべて大学にあるべきものなのだから、時の勢でいずれかを強調しても、他を否定することにはなるべくもない。……ある場合には研究第一主義といい、ある場合は実用のために緊密に事業家と結ぶというようで、別にどうでなければならぬということでもなかった。要するに研究と応用と教育と、本来あるべき大学として成長しただけである。ただ新しいが故に、とくに既存の大学とちがった個性を出したいという願望が、何かの主義を主張したい気持となっていたのであろう。東北大学の学風は研究第一主義だと、いまにおいてもいわれることがあるが、右のような次第で、一つのスローガンになったにすぎないといつていいと思われる。（『五十年史』上・129頁～130頁）

ここに示された見解は、本来の大学の持っている側面（研究・応用・教育）が時に応じて強調されて、振幅を経ながら次第に学風となっていったというものである。たしかに「研究第一主義」が創設期に説かれていた。しかし、それは創設期の東北帝国大学の学風・特色を示す唯一無二の言葉ではなく、また固有の特色でもない。大学の本来的なあり方の一面を示す言葉であったというのである。「研究第一主義」という語を東北帝国大学創設以来の理念・伝統として唯一絶対化するのではなく、大学のあるべき側面から生み出されたいくつもの標語と関係づけて、「一つのスローガン」として捉えるということは、「研究第一主義」を相対化する発想といえよう。そして、この主張は「東北大学の学風は研究第一主義だと、いまにおいてもいわれること」というように、当時における「研究第一主義」を東北大学の学風だという風潮に対して発せられたものだったのである。

以上のように『五十年史』の主張を辿ってくると、その基調として初代総長から第3代総長までの標語をもとに、「研究第一主義」とは大学のあるべき側面が時に応じて強調されたスローガンの一つに過ぎないという「研究第一主義」の相対化を読み取ることができる。

3、「研究第一主義」と「実用を忘れざるの主義」

ここでさきに検討した小野の文章と『五十年史』にみられる福原の記述をもう一度みてみよう。

- ① 福原^{ママ}鐔次郎氏を大正六年総長として迎へた時は、恰も欧州大戦に依る日本の産業革命の時代であつた。学生も教授も総長も皆急迫した時代要求に順応して職業者としても^④満足し、技術家、専門家として喜悅しながら、其の時代要求の教育を受授したのであつた。……『今は時代の強請があるから止むなく此の儘にして、職業教育的方針を進

めて居るが、時代の要求の停止した時、東北大学は人間としての教育をやる方針に変更されねばならぬ』とは親しく自ら断言された所であつた。(小野「新学風と大学精神の高調」)

- ② 第三代の福原総長は、この倫理色をまったくふり払ったようである。そうして大学もまたおのずから職業教育に効果ある点を強調している。これは大戦の進行にともない、社会経済的発達が、『実用的』人材をひろく要求してきつつあるのにも応じたのであろう。(『五十年史』上・129頁)

この二つの文章を比較して、注意すべき点は二つある。ひとつは、『五十年史』では小野の文章の傍線部②を傍線部③の『『実用的』人材』というように置換しているということである。もうひとつは、傍線部④からわかるように、小野の文章では、福原が時代の要請からやむをえず「職業教育的方針」をとっているのであり、時代状況が変われば「人間としての教育」を方針とすべきであると説かれている点である。さらに、小野は「学術技芸を教授して其の蘊奥を極め国家須要の人材を養成せんとするならば、東北大学も、天下に冠絶する大精神を確立して人間としての教育から始めねばならぬ」とも述べており、「人間としての教育」の必要性を強調している。かかる主張が、『五十年史』では捨象されているのである。こうした言葉の読み替えと文章の捨象によって、福原が「実用」を唱えた人物として描き出されているのである。

以上の点に関連して、『五十年史』で澤柳が「学術研究第一主義」と「実用を忘れざるの主義」を説いたと指摘されていたことをここであらためて検討したい。以下で、その根拠となった入学式の訓辞と「東北帝国大学」と題された文章をみてみよう。

- ① 大学は無論学術の研究を主とするものなるが故に、学術の研究に重きを置くは大学としての特色にして各国の大学皆然らざるなし、……日本の如きも尚ほ一層この精神を発揮するの必要あり、我東北大学はこの点に於いては何れの大学にも退けを取らざる覚悟なり、就中英国の大学は人格の修養といふ点に於いて一種の特色を有し居れるが、当大学亦学術の研究盛んにすると同時に此人格の修養といふ点に重きを置き、出来得る限り完全なる大学として進みたまき希望にして、……

(『河北新報』明治44年9月12日)

- ② 我社会が大学の増設に冷淡なるが如く、既設大学の功過に関しても、亦甚だ冷淡なりしが如し、適ま大学に対して云ふ所を聞けば曰く学閥を樹つ、曰く大学は官吏養成所なりと、かゝる猜忌狭量的にして、而かも浅薄なる観察より出づる言が大学に向つて刺戟たる価値なきは明かなり、殊に遺憾とする所は大学一半の目的否な主要の目的が学術の研究にありとの趣旨すら未だ明かに領解せらるゝに至らず、……予は学者と世間とは没交渉なるべしと云ふものにあらず、要は大学教授として、学者として其本分を尽くす者と其本分を怠る者とを甄別して、一は之を称し一は之を貶べしと云ふのみ。(『河北新報』明治44年9月13日)

『五十年史』では、傍線部③～④を「学術研究第一主義」の根拠とみているのであろう。しかし、ここには「実用」に関わることは明言されていない。「東北帝国大学」と題した文章は『五十年史』では要約して載せられているが、その中で「大学の目的の一半は社会に対してあり、他の一半は研究にある」と述べられている。この記述に該当するのは傍線③と④であると考えられる。この傍線部③を根拠として「実用を忘れざるの主義」というのであろう。しかし、これらの資料を一瞥してわかるように、澤柳の主張の核心は大学の任務が学術研究であるという点にあるといえる。

さらにここで明言されているのは「実用」ではなく、「同時に此人格の修養といふ點に重きを置き」というように、「人格の修養」である。この「人格の修養」とは、この入学式訓辞よりおよそ半年前、『岩手日報』（明治44年4月14日）に掲載された「澤柳東北大学総長談」にある「大学の教育に就いては、世間大に議論のある所なれども、英国の如きに我が大学は学者を養成する目的にあらず、紳士を養成するものなりと揚言し、頗る学生の徳育に重きを置く傾向あり、我国現今の大学を彼の英国化することは無理なる注文なれども、余は決して今日の我大学の徳育に就て満足するものにあらず、何等の方法を以て大学々生の徳性の発達、人格の向上を計る必要を認むるなり」⁽¹⁶⁾ という記述とあわせてみると、大学の教育に相当するものであり、具体的には学生の人間性を高めることと捉えられる。澤柳は大学の本質を学術研究と人間性の向上、すなわち研究と教育にあると主張しているのである。かりに『岩手日報』をみなくとも、入学式の訓辞と「東北帝国大学」の文章をみて、澤柳の主張の眼目が「研究」と「教育」にあることを読み取ることは困難なことではない⁽¹⁷⁾。つまり、『五十年史』では澤柳の主張から「人格の修養」という「教育」に関わるものを捨象し、あえて「実用を忘れざるの主義」を読みこみ、その結果、「研究」と「実用」ということがセットで提示されることになったのである。この捉え方は、いったい何を物語っているのか。この点を明らかにするために、さらに『五十年史』の記述を追っていこう。

4、『五十年史』の基調

『五十年史』では、「高橋総長がつねに説いたことばはあまりに有名である。東北大学は研究第一主義だというのがそれである」（『五十年史』上・523頁）と、戦後に旧制から新制大学へと切り替わる昭和24年から東北大学創立50周年記念式典が行われた昭和32年まで、第9代総長の任にあった高橋里美が「研究第一主義」という語を常用したと指摘している⁽¹⁸⁾。それに続けて、『五十年史』では以下のように述べられている。

ことばとしては、五〇年前の開設当初に総長沢柳政太郎がとなえて以来、いっけられ
てきた標語である。産業の未発達な土地につくられた東北大学としては、工学部・理学部
などが直接に東北地方と密接せず、地方産業のためであるより基礎的研究を第一義とする
方針をとってきたのであるが、その研究第一主義の意味はただ単純に初期の意味としてつ
づいたわけではない。軍事産業と結び、兵器廠的な応用において発達した時期も経たし、
あたかもまたその時期に法文学部のように実践に結びつくことを厳に禁止されたというよ
うなこともあり、大学の歴史は一本筋ではなかつた。そしてまた戦後の新制大学には、応

用研究・技術者養成が強く要求され、東北地方はともかくとして、日本的規模で、基礎的研究に沈潜してもおられない事情も生じている（『五十年史』上・523頁～524頁）。

「研究第一主義」という語は開設当初から不変の意味として唱えられてきたわけではない。その語の意味は時代とともに変化しており、そこにはさまざまな時代的課題が投影されている可能性を示唆している。そして、「東北大学の歴史の、注目すべき時期に、つねに中心にある一人として、大学とともに歩んできた人である。その口にいる研究第一主義ということばの内容は複雑・深刻なものであったであろう」（『五十年史』上・524頁）と、時代の影響を受けながら変遷してきた東北大学の歴史の中心に高橋里美がいたとし、その口から発せられる「研究第一主義」という語の意味内容が「複雑」かつ「深刻」であったであろうと推測するのである。

ここに至って、『五十年史』における「研究第一主義」をめぐる見解の全貌が明らかになる。それは、①初代総長の澤柳が「研究第一主義」と「実用を忘れざるの主義」をうち立てるとともに、「研究」と「実用」のバランスを説いた（また『五十年史』では「専門」とも評している）、②澤柳の後に、第2代総長の北条時敬は「学者の養成」を説き、第3代総長の福原は「職業教育、実用」を説くというように、各総長が大学のあるべき一側面を標語として述べ、次第に「研究第一主義」がスローガンの一つとなったこと、③創設期から戦後に至るまで「研究第一主義」という語は時代の影響を受け、その意味内容が変化し、第9代総長の高橋里美が「研究第一主義」の語を常用した、というものである。大学のあるべき側面を時の総長がさまざまな標語として述べ、「研究第一主義」という語はその中の一つに過ぎず、意味内容も時とともに推移する——かかる見解の基調にあるのは、「研究第一主義」の相対化である。

では、なぜ『五十年史』で高橋里美の主張が取り上げられたのであろうか。たしかに高橋の入学式・卒業式告辞をみると、「研究第一主義」という語を多用しているが、ここで注目したいのは以下の資料である。

本学の学風は研究第一主義だと学長がよくいうので、学生が気にしているそうである。これを議論してみたり、意見を広く聞いてみたいという。学長がそういわれたからそれにちがいないと、あっさりかたづけておかないで、よく考えて、よく理解し、また意見もだしあってみるのが、本学に学ぶものの当然にとるべき態度であろう。だから趣旨に賛成したのだが、そこで私見も聞きたいといわれて実は困っているのである⁽¹⁹⁾。

これは経済学部教授であり、『五十年史』の編集委員長であった中村吉治の文章である⁽²⁰⁾。ここで、中村は高橋里美学長が東北大学の学風を「研究第一主義」とであると述べるので、学生がそれについて議論したり意見を聞きたいと考え、自分に私見を求めてきたというのである。ちなみに、『東北大学新聞』のこの号には「東北大学の学風をきる＝現状をどうみるか＝」という特集が載せられている。内容は、中村の東北大学の学風に関する文章、教官の座談会の記事、学生へのアンケート結果である。記事の中には、「“学風”——果たして学風なるものは、実際にあるのか。“研究第一主義”——よく言われることばである。しかしわれわれは“研究第一主義”の真に意味することを真剣に反省しなければならない時機に立っているのではなかろうか」

と、東北大学の学風や「研究第一主義」という語について、その意味するところを問い直そうという編集部の文章がある。すなわち、この資料は高橋里美の発言がきっかけとなって、東北大学の学風や「研究第一主義」の意味を問い直す動きが生じ、その動向に、『五十年史』編纂の中心人物であった中村吉治が向きあっていたことを示しているのである。

中村は、学者のあり方を日露戦争から大正中期、太平洋戦争、戦後のレッドパージ、そして現在へと、学問と実践、研究と社会との関わりという観点から辿ることによって、「研究第一主義」の意味を考察している。その中に以下のような記述がある。

日露戦争の伝説の主（学者は世間知らずで、世事に無関心で研究に専念している意一筆者注）は自然科学者だったが、自然科学の方面では、そののち常に社会と密着してきた。象牙の塔どころでなく、社会的要請で研究し、研究の進歩が技術化してゆく。技術化と研究とは不可分だった。あたりまえの話である。満洲事変がはじまって、寒地で日本刀が折れやすいとなると、本学からは低温でも折れない金研刀がすぐできた。一人一殺などという物騒な団体ができて暗殺が多くなると、防弾チョッキができた。一事が万事である。研究が進んでいたから応用ができたわけだが、またそういう必要が研究を進めてもいた。だから法文学部あたりでは、学問に専念、実践していないなどと、法文学部長が汗をかいて防衛しているときに、理工方面では、時勢に超越していることは許されない。戦争を知らぬなどはもってのほかという現象を呈していたのである。

傍線部④では、日露戦争以後、自然科学の分野は社会と密接な関わりを有しており、研究と社会的要請が不可分に結びついていたと述べられている。東北帝国大学理科大学が設置されたのは、日露戦争終結の6年後、明治44年（1911）のことである。中村の捉え方によれば、まさしく研究と社会の要請が不可分に結びついていた時代にあたる。先に引用した『五十年史』にみられる「入学式の日宣言に見るように、理科大学は内に学術研究第一主義をとり、外に社会と親近し実用を忘れざるの主義をうち立てた。矛盾したようなことであるが、当時の日本の時代が要求するところを常識的にいうとすれば、そんなことになるだろう」という時代認識は、この中村の見解と通底するものといえよう。

また、傍線部⑤では社会と密接に結びつく自然科学の分野に対して、法文学部では社会運動の弾圧によって社会との結びつきを断ち切らねばならない状況にあったことが述べられている。これは、先に引いた『五十年史』の「軍事産業と結び、兵器廠的な応用において発達した時期も経たし、あたかもまたその時期に法文学部のように実践に結びつくことを厳に禁止された」というようなこともあり、大学の歴史は一本筋ではなかった」にみられる戦争と結びつく自然科学、実践を禁じているといわねばならなかった法文学部という認識とも重なり合う。

さらに注目すべきは、以下のような中村の主張である。

研究、教育、就職、社会化など、いずれも大学として欠くことのできないものだから、その中のどれを第一とするかというようなことは、実はそれほど重要な問題ではないように私には思われる。もっと大切なことは、それが何であるにせよ、学風として主張しうるも

のを生みだす土壌を作ることだろう。いままでの本学に、そういう学風があったかどうか、その中にいるためか、私などにははっきりしないが、ほかの大学とくらべて、とくに主張しうるほどのものはどうやらなかったのではないかという気がする。旧高校生が自治や自由を標語とし、校風と主張しながら、実はどの高校生をとっていても同じ米粒ぐらいに以ていて、区別があるとすれば、何高出身だ、先輩だ後輩だというようなつながり、やがて学閥をそだてる芽くらいしかなかったように、どこの大学といっても、たがいにとりたてていうほどの学風なんかなかったのではないか。

まず傍線部に注目したい。中村は研究・教育・就職など大学に欠くべからざる要素の中で、どれが第一などと取りたてていうことはさほど重要ではないと述べている。ここには、東北大学の学風を大学本来のあり方を構成する諸側面と関係づけて捉える発想をみることができる。これは、先にみた『五十年史』の主張——大学のあるべき側面と学風とを関係づける——と同様の発想といえる。ただし、こうした共通面を有しつつも、『五十年史』では「ただ新しいが故に、とくに既存の大学とちがった個性を出したいという願望が、何かの主義を主張したい気持となっていたのであろう」と「研究第一主義」を唱える心情に言及し、中村はそもそもどこの大学でもことさら学風などといえるようなものは存在しなかったのではないかと学風自体への疑義を呈しており⁽²¹⁾、導かれた結論には差異が認められる。しかし、「研究第一主義」を東北大学の唯一の伝統、または固有の特色として無前提に絶対化することなく、大学本来のあり方と関係づけて相対化する視座は『五十年史』と中村の主張に共通するものとして注目に値する。

以上の検討をふまえると、『五十年史』の見解には「研究第一主義」を東北大学の学風・特色として唯一絶対化することなく、大学のあるべき側面や時代状況と関係づけて相対化する基調があり、それは『五十年史』の編集委員長であった中村吉治の発想と軌を一にしているといえる⁽²²⁾。

むすびにかえて

本稿では、「研究第一主義」をめぐる『五十年史』の見解を編纂当時の周辺資料にも目を向けつつ検討してきた。『五十年史』の特色は、「研究第一主義」を東北大学の学風・固有の特色として顕彰するのではなく、大学の有する多様な側面の一部にすぎないと捉えて相対化することにある。このような「研究第一主義」を相対化する視点、また研究と実用、研究と社会との関わりから「研究第一主義」を把握する視点は、『五十年史』の編集委員長であった中村吉治の発想に共通するものといえる。そして、以上の『五十年史』や中村の主張は、高橋里美学長が「研究第一主義」を強調したことを契機として生じた東北大学の学風や「研究第一主義」の意味を問い直す動きと対峙する中で形成されたと考えられる。

思うに、『五十年史』の基調、中村の「研究第一主義」に対する見方は、安易に東北大学の伝統・特色を「研究第一主義」とする姿勢に反省を迫るものといえる。以上の見解は、「研究第一主義」をめぐる検討に際し、そもそも大学の伝統・特色・学風とはいったい何かという根本的な問いかけ、そしてその問いに対する答えを持たずしては的確な考察ができないという課題を突きつける。筆者はかかる問いかけに対する明確な答えを現在持ち合わせているわけでは

ない。しかし、『五十年史』や中村の主張を生み出した東北大学の学風や「研究第一主義」の意味を問い直す動きをさらに明らかにしていくことで、その糸口がみえてくるのではなかろうか。

中村が『東北大学新聞』に学風に関する文章を著して以降も、東北大学の学風、「研究第一主義」に関する記事が『東北大学新聞』にしばしば掲載されている。また昭和41年に刊行された東北大学の現状を内外に発信する『東北大学』の中では、「研究第一主義」が「研究のみを尊重して他を顧みないということではなく、深く真理を探究することに努力を重ねることが、やがて教育の面に新たな効果が顕現せられるということであって、研究の成果が挙がる場所に、よき教育が生まれることを確信しているのである」と定義されるに至る⁽²³⁾。このように昭和30年代から昭和40年代前半は、東北大学の学風とは何か、「研究第一主義」とは何か、という根本的な問いかけがなされ、その答えをめぐるさまざまな議論が展開され、また「研究第一主義」という語の意味と機能が多様化した時期であった⁽²⁴⁾。昭和35年に刊行された『五十年史』は、まさに学風や「研究第一主義」をめぐる議論の渦中において編纂されたといえる。本稿で明らかにした『五十年史』の「研究第一主義」に関する見解のもつ意味は、当該時期における「研究第一主義」の語をめぐる動向の中で捉え直すことによってより鮮明になるといえよう。さらに、かかる動向を検討することで、大学の伝統・特色・学風とは何かという根本的な問いかけに対するさまざまな回答が明らかになり、それらの生み出される過程を描出することが可能となる。本稿では十分に行えなかった以上の考察を今後の課題として、ひとまず擱筆することとしたい。

〈付 記〉

- ・引用資料には適宜句読点を付し、新字体に改めた箇所がある。
- ・引用資料の所蔵については、とくに明記していないものは、すべて東北大学史料館所蔵のものである。

〈注〉

- (1) 東北大学 Web サイト、<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/profile1-2.htm> (2008年1月15日)。
- (2) 東北大学の理念や伝統として「研究第一主義」とともに「門戸開放」・「実学尊重」があげられる。しかし、多くの場合、まず最初に示されるのが「研究第一主義」・「研究第一」という語である。たとえば、受験生を対象に作成された「東北大学総合案内 二〇〇七版」のなかにある「東北大学を選ぶ理由 六つのポイント」において、まず最初に「東北大学の誇る『研究第一主義』『研究第一主義』の学風を貫く東北大学。自然科学・人文科学・社会科学の各分野において、ひたむきに『知の創造』に挑み続ける研究者たちの真摯な姿勢を生きた教材として、学生たちは『知への情熱』が燃え立つことを感じ取るはずです」と、「研究第一主義」があげられている。
(東北大学 Web サイト、http://www.bureau.tohoku.ac.jp/campus_guide/2008.pdf、2008年1月15日)
- (3) 『評議会議事要録』平成十三年度。
- (4) 『東北大学広報』第205号(臨時号)、2001年12月20日。なお、「検討委員会報告Ⅲ」は、『東北大学百年史八 資料一』(東北大学、2004年3月)に収録されている。
- (5) 「検討委員会報告Ⅲ」では、「初代総長沢柳政太郎は「学術研究第一主義」を説いたといわれる(『五十年史』)。……「沢柳の専門、北条の学者、福原の実用」ともいわれるように(『五十年史』)、特に第三代総長福原鑑次郎(りょうじろう)が「研究第一主義」とは幾分違う面を強調して、実用主義、職業教育の重視を言ったことが起源のようである」というように、『五十年史』の見解をもとに検討がなされ

ている。

- (6) たとえば、後述するように『五十年史』では初代総長である澤柳政太郎が「研究第一主義」を唱えたと指摘する。もちろんこの事実が妥当か否かを検証することは重要であるが、かりに澤柳が「研究第一主義」を唱えていないことが明らかにされても、『五十年史』の見解とその基調を根本的に揺るがすことにはならないと筆者は考えている。その理由は、本論の叙述で明らかになるであろう。
- (7) 『創立二十五周年記念 東北帝国大学ノ昔ト今』(東北帝国大学庶務課編、1937年)。
- (8) 本多光太郎「創立第二十九周年記念日告辞」(『東北帝国大学学報』第246号、1940年6月)。なお、本多が「研究第一主義」という語を使用したのは、管見の範囲ではこの資料だけであり、他の資料では「研究本位」、「研究の盛んなること」、「基本的研究を第一義とする」などさまざまな表現を使用している。こうしたことは本多に限られたことではなく、当時の資料をみると「研究第一主義」・「研究第一」の使用例は決して多くなく、また「研究を重視する」という意味をもつ他の語に置換可能な言葉であった。以上より、筆者は戦前までは「研究第一主義」・「研究第一」が東北大学の特色・伝統を示す語として特権的な位置を占めていなかったと考えている。この点に関しては、別稿を予定している。
- (9) 管見の範囲では「研究第一主義」・「研究第一」の語とその関連づけられる事象は、本文で指摘した、①学術雑誌の出版、②附置研究所の存在、に加え、
 本学の特徴をなす研究第一主義は工学部に於いても着々その進展を示して居るのであるが、就中その成果をなしたのは電気通信に関する研究である(『創立二十五周年記念 東北帝国大学ノ昔ト今』)にみられるような研究内容に関するものに集約される。
- (10) 『東北大学新聞』昭和34年6月5日、金倉圓照教授談。
- (11) 『東北大学新聞』昭和33年3月5日。なお、この文章は「特集 受験生のために」と題された記事の中にみえる。
- (12) 『東北大学新聞』昭和37年3月1日。なお、木村男也は医科大学病理学講座教授で、『良陵百二十年史』(良陵同窓会百二十年史編纂委員会、1998年)では、「先生の日常はまさに研究に没頭するという表現があてはまるものであった」と評されている。
- (13) 『五十年史』において、澤柳が「研究第一主義」を唱えたと指摘されたことによって、その他の当時存在していた「研究第一主義」の多様な捉え方が隠蔽されてしまったといえる。つまり、東北大学の学風や特色を総長の発言と関係づけることが自明なものとなってしまったのである。言うまでもないことだが、学風や伝統は総長の発言だけに限定して明らかにできるものではない。ここにみられるさまざまな教官の発言や行動、さらには学生の意識、カリキュラムの編成などからもアプローチする必要がある。かかる試みによって、『五十年史』の見解を超える端緒を見いだすことが可能となろう。なお、現在の東北大学の学問風土や研究室の環境に光をあてて、研究体制の実態を明らかにしようとする試みとして、橋本鉦市ほか「学問風土の研究(一)～(四)―東北大学の研究と教育―」(『東北大学大学院教育学研究科研究年報』五四―一・2005年、五四―二・2006年、五五―一・2006年、五五―二・2007年)がある。
- (14) 自修会は大正2年(1913)に設立され、教職員と学生の交流を深める機能を果たした組織である。命名は澤柳による。大正4年(1915)3月に『自修会報』が発刊されている。詳細は『東北大学百年史一通史一』(東北大学、2007年)96頁～97頁参照。
- (15) なお、『五十年史』では北條の主張の根拠として大正3年(1914)7月15日の「理科大学卒業生ニ對スル演説條目」を挙げている。一方、小野の文章では大正2年(1913)9月22日に行われた開学式における北條の式辞を根拠としている。それぞれ根拠に相違があるとはいえ、北條の方針を「学者の養成」と捉える点で共通していることを強調したい。
- (16) 『岩手日報』は岩手県立図書館所蔵のものを引用した。
- (17) 研究と教育について、澤柳は以下のように述べている。
 既に我東北大学を學術研究の府となすに決せる以上は勢ひ教授本位、自由研究の法則を許さざるべからず、……左れど假令大学の本質は研究に在ればとて、教授たるものが自己の研究の結果を悉く学生に発表するの必要なく、寧ろ却つて大に弊害あり。……学生の力量に相当せる程度の智識を授け、自己の研究の結果は別に之を学界の雑誌なり著書なりに於て、之を世間に発表するを至当なりとす。(『岩手日報』明治44年4月14日)

澤柳は教官に最新の研究を奨励するが、その成果を学生の講義にそのままいかすことは弊害があるとし、学生への講義は学生の力に応じてなすべきであるという。すなわち、最新の研究とその成果が、そのまま学生の教育につながるというわけではないのである。こうした主張は、後に『東北大学要覧』で定義される「研究第一主義」とは異質なものであり、澤柳の主張と後の「研究第一主義」との間に断絶があることを示唆している。

- (18) 以上の見解は、『東北大学百年史―通史―』（765頁～766頁）にも受け継がれ、高橋里美が「研究第一主義」を強調し伝統化したと指摘されている。
- (19) 『東北大学新聞』昭和31年11月25日。以下、とくに断らない限り、中村の主張はこの資料に拠る。なお、本資料は中村吉治『社会史への歩み二 学界五十年』（刀水書房、1988年）にも収録されている。
- (20) 『五十年史』末尾の「編集記」によれば、昭和31年9月10日に五十年史編集委員会が発足、中村吉治が委員長となり、翌昭和32年8月に『五十年史』の編集方針が立てられたという。
- (21) このような中村の主張はきわめて重要である。中村の主張は、ただ「研究第一主義」・「研究第一」という語を追いかけて東北大学の学風・特色と捉えることの限界を露呈させるからである。つまり、東北大学の内部に限定して「研究第一主義」・「研究第一」という語の追跡をしても、『五十年史』の枠組を超えることはできないのである。『五十年史』の枠組を超えるための方法の一つは、東北大学の学風の特色を他の大学との比較を通して明らかにすることである。たとえば、東北帝国大学理科大学設置と同年に創設された九州帝国大学では、山川健次郎初代総長が以下のように述べていた。

後藤学長の話によると、当医科大学では学生中にも少しづつ、新研究をする者もあるやの事ではありますが、是は実に悦ばしい事で東京、京都の大学でも理科大学を除いたら学生の仕事など云ふ事殆ど無い事であらうと思ひます、此学風は是非奨励あつて充分に発達するやう御尽力あらんことを希望するのであります、大学令に拠て諸君は講座を担任して居られますが、講座を担任する以上は単に学生に授業する許りでなく學術を研究し學問を進歩せしむるといふ事が伴ふて居るのであります、……斯く研究が重いものでありますから成るべく他の事に關係する事は避けられて研究に費すべき時間をタツブリ取りおかれ、殊に万止むを得む場合の外は営利会社などには關係することは避けらるゝことを希望するのであります、（『九州大学七十五年史 史料編』上巻・310頁）

山川は、教職員に対して九州帝国大学開設以前に設置されていた京都帝国大学福岡医科大学において新しい研究を遂行する学生がいることに注目し、こうした新研究を行うという姿勢を奨励しそれを学風とすべきこと、教授には學術研究を遂行し、研究以外の雑事に惑わされることなく、研究に励むことを提唱している。東北帝国大学と九州帝国大学の初代総長はいずれも學術研究の重視を唱えていたのである。しかし、昭和に至り、東北帝国大学ではさきにみたように「研究第一主義」・「研究第一」が自らの大学の特色・学風として語られるのに対し、九州帝国大学では「實際上わが大学の各学部には亘つて、研究第一といふことが必ずしも行はれてゐるのではないことは、容易に見られませう」（『九州大学新聞』昭和8年7月5日、九州大学大学文書館所蔵）というように、研究重視が実現されていないという発言がなされている。この相違は果たして何から生じるのか、また東北帝国大学と九州帝国大学における「研究」の意味の共通性と差異を明らかにしていくことが、『五十年史』の枠組を突破する糸口となろう。

- (22) 本論で考察してこなかった東北大学の学風・伝統として「門戸開放」がある。中村は、「昭和八年に東北大学に赴任してきて、変っているなと思ったことの一つに、ここの学生は、当時の他の帝国大学とちがって、高等学校卒業生だけでなく、いろんな学歴の学生が多く、中国留学生や女子学生なども、みな本科生として在学していることだった」と述べている（「本学創立のころの新風」、『社会史への歩み二 学界五十年』所収）。中村の眼には、他の大学と異なる東北大学の特色は「研究第一主義」ではなく、多様な学歴を有する学生・留学生・女性の入学を許可した「門戸開放」にあると映っている。中村は『五十年史』編纂に際し、「研究第一主義」を相対化する一方で、「門戸開放」にスポットをあてることを意図していたのではないかと筆者は考えている。
- (23) ちなみに、この「研究第一主義」の定義は、昭和38年（1963）4月10日の入学式における黒川利雄学長の告辞とほぼ同一の文である（黒川の告辞は『東北大学学報』第621号参照）。
- (24) 昭和39年（1964）に東北大学教育学部にあった教員養成課程を学外へ分離するという動きに対して、教員養成課程を担う旧師範学校の流れをひく教育学部分校では、分離反対の意を表明する文書が作成され

ている。その中で「研究第一主義」という語が、「なお、本学における研究第一主義の伝統は脈々としてわれわれ教官にも流れており、日夜精いっぱい努力を続けているのである」というように、東北大学の一員である証として機能している（『宮城教育大学十年史資料集』上・64頁、宮城教育大学十年史編集委員会、1976年）。